

# オーストラリア口語英語の発音

柏瀬省五\*<sup>1</sup>

## Pronunciation of Australian Spoken English

S. Kashiwase \*<sup>2</sup>

(Received October 31, 1997)

The present paper deals with the Pronunciation of Australian Spoken English:  
(1) Samples of Popular Pronunciation of Australian Spoken English, (2) 3 Varieties of Australian Accent of Spoken English, (3) Social Attitudes towards 3 Varieties of Australian Accents, (4) Sociolinguistic Shift of Australian Pronunciation Practice, (5) Irregularities of Australian Pronunciation of Spoken English. The Characteristics of "General" and "Broad" Accents of Australian English.

### 0. はじめに： この小論で英語の発音を扱うことについて

言語において、発音は瞬時の一次的に重要な表現形式であるが、文字による記述は、瞬時の発音を永続的に記録しようとする、いわば二次的な表現形式である。従って、瞬時の発音の問題を永続的文字記号等によって説明することは、それぞれの存在目的、機能が異なるので、整合させることが技術的に極めて難しく、誤解を避け難い。しかし、この小論において、オーストラリア口語英語の発音の輪郭を、敢えて誤解を恐れず、非常におおざっぱな発音記号等を利用して、説明を試みたいと思う。

母音については、辞書等で慣例的に使っている発音記号文字を参考に説明に差し支えない程度に一部簡略変更して使う。例えば、単母音は次の6つの /i, e, u, a, o, @ 等 / で表わす。従って、*cat*, *cut* の母音は共に /a/ で表わす。長音記号として /:/ を使い、長母音は単母音を延ばす音（厳密には”延ばす”だけではないが）として表わし、二重母音は単母音の組み合わせ（実際は、その様に”単純”ではない）で表わす。その他の音は、（余りにも”乱暴”ではあるが）これらのどれかに近い音として表わす。

子音については、辞書等で慣例的に使っているアルファベット文字で表わす。ただし、*thin*, *there* 等の子音は、/ths/, /thz/ 等のように組み合わせ文字で表わす。

この小論で使用される「発音標記表」を、実例を添えて末尾に掲げておく。

---

\*<sup>1</sup>岡山大学環境理工学部

\*<sup>2</sup> Faculty of Environmental Science and Technology, Okayama University.

## 1. オーストラリア口語英語の発音の実例

オーストラリア口語英語を、おおざっぱに見ると、括弧 ( ) 内の意味の通常の印刷等で使っている綴りで書かれた英文は、斜線 / / 内の発音標記で示したように話される。

- (1) Make way for the lady with the baby. (赤ちゃんを連れた婦人に道を開けてあげなさい。)  
/maik wai fo: thz@ laidi withz thz@ baibi/
- (2) Where are you going today? (あなたは今日どこに行きますか?)  
/whe@ @: yu: goin t@dai?/
- (3) How did you find this place? (どのようにしてこの場所を探しましたか?)  
/audj@ faind thzis plais?/
- (4) What did you do today? (今日は何をしましたか?)  
/wadj@ du: tudai?/
- (5) Did you come by bus? (あなたはバスで来たのですか?)  
/didj@ kam bai bas?/
- (6) When did you arrive in Sydney? (何時シドニーに到着しましたか?)  
/whendj@raiv in sidni?/
- (7) Did you have a good weekend? (楽しい週末でしたか?)  
/djav@gudwi:kend?/
- (8) Are you going to watch TV tonight? (今夜テレビを見ますか?)  
/a: y@gann@ woch tele tunait?/
- (9) How much is it? (それはいくらですか?)  
/emachizit?/
- (10) We're going to organise a party. (パーティの準備をします。)  
/wi:@gan@o:g@naiz@pa:ti/
- (11) Do you want to be in it? (あなたも参加したいですか?)  
/djawanabi:init?/
- (12) Give us a go. (やらせてください。)  
/giv@s@gou/
- (13) Good day. (こんにちわ。)  
/gu'dai/
- (14) How are you going? (元気かい?)  
/auy@goun/

## 2. 実例の出典について

上記の英語の実例は、Australia, Macquarie University (Sydney) で、海外から来た学生 (留学生) に、Sydney Committee (どのような団体か不祥であるが、新学期に学生会館前でオーストラリア社会に順応する為の注意を記したパンフレットを山積みにして、学生に配布し

ていた。)が配布した、"Australian Speech" についての簡単な案内パンフレットから取った。オーストラリア人自身が外国人に対してオーストラリア英語とはこのようなものだと思っている概略がうかがい知ることができる。

### 3. オーストラリア口語英語の発音の全般的印象

同パンフレットの説明によれば、オーストラリア人は一般に "They speak faster and less distinctively than you are accustomed to hearing the language spoken." (「オーストラリア人は皆さんが思っているより早く不明瞭にしゃべります」) と説明している。それ故に外国人には評判が必ずしも良くないが、しかし、私には、オーストラリア人の英語は、概してアメリカ人の英語よりわかりやすく、聞きやすいように思える。第一、表現が楽しい。

### 4. オーストラリア口語英語の発音に関するさまざまな見方

(1) "Australian speech is Cockney" (オーストラリア英語はコクニーだ) について

"Cockney" とは、「ロンドンの下町 (East End 地区周辺) 子の英語の訛り」のことである。"Cockney" では、語頭の h が脱落 (dropped) する。従って、*hill*, *hold*, *hammer* は、/iɪ/, /ould/, /am@:/ 等と発音される。二重母音の /ei/ は /ai/ と発音される。*may*, *pay*, *way* 等は /mai/, /pai/, /wai/ 等と発音される。また、*going*, *coming* の -ing は /in/ と短縮 (clipped) して発音される。また、母音で始まる語の前にしばしば /r/ 音が挿入 (intruded) される。すなわち、*soda and milk* は /soudaranmiuk/ のような発音である。オーストラリア英語の発音が、この「ロンドンの下町子訛り」("Cockney") の特性を確かに持っていると言う指摘は、19世紀からずっと継続してなされてきた。「オーストラリア英語の起源は "Cockney" だ」という説明はこのことが理由である。

(2) "Australian Speech is nasal" (オーストラリア英語は鼻声だ) について

極めて一般的な話として、オーストラリア人は、英語を発音する時、余り口を開けないで、喉の奥の方で発音する傾向にあるという。その理由は、オーストラリア人の周辺には蠅が多く、口を開けると、蠅が口の中に入って来るからだという笑い話紛いの説明が一般に流布していた。最近のシドニーやメルボルンのような都会では、蠅はそれほど多くはないが、発音が喉の奥の方でなされ、声が鼻から聞こえる。すなわち、オーストラリア英語は鼻声だというのは相変わらずのようである。

もう少し音声学的に説明すれば、オーストラリア人は、喉の奥の方で発音する傾向にあり、発音時に軟口蓋 (soft palate) が比較的下がって、肺から上がってくる声を作る空気が、鼻腔に抜けやすいからだと言明される。

いずれにしても、英語の模範とされる英国南部の標準英語を話す人と比べると、口の開け具合が狭く、その英語が鼻声に聞こえるのは事実のようである。

## (3) "Australian speech is monotonous" (オーストラリア英語は単調だ) について

何かに付けてオーストラリア英語は単調だと言われる。"monotonous"、"flat"、"lacking in resonance"、"little modulation"等と言われる。これは stress (強勢)、intonation (抑揚) についての印象であろう。一般にオーストラリア人は、一方で単語を短く省略する (clip) 傾向にあるが、他方では長い単語を使うことが好きで、結果として発音のリズム (rhythm) が遅く「単調に響く」ことになる。また、連語は、最初の語に強勢を置く傾向が強い。従って、*all the same*, *after all*, *Guy Fawkes Day*等は、英国南部標準英語発音ではそれぞれ same, all, Day のように最後の語に強勢が置かれるのが普通であるが、オーストラリアでは、句の先頭の語、all, after, Guy に強勢が置かれて発音される。これがあたかも長い一個の名詞を発音しているかのような印象を与え、単調に響くのである。

また、英国英語では、一般には文末に置かない *well*, *but*, *by*, *and*, *to*, *in*等の語 (機能語) を *I'm going down the street well* (え〜と今その通りを歩いていくところだ。) *I don't like it but* (だけどそれは好きではない。) のように語末に置いて、しかも、はっきり発音する。従って、全体が flat に響き、抑揚が少ない印象を与えるのである。

また、*cat* は /ca:t/, *get* は /ge:t/, *mad* は /ma:d/ のように幾つかの語において単母音よりはむしろ長母音のように発音するのも、間延びがして単調に響く原因の一つであろう。いずれにしろ、オーストラリア英語は単調に響くものらしい。

## (4) "Australian speech is drawling" (オーストラリア英語はドラドラと母音を引き伸ばして話す) について

母音を引き伸ばしてゆっくりと話す傾向の訛りについては、英国の「オックスフォード訛り」、米国の「南部方言」についてしばしば言われる。オックスフォードの場合、"affectedly drawling speech" (「気取って母音を長々と引き伸ばす話っぷり」) であり、米国南部の場合は、"Southern Drawl"と言われ、「ものうげに、だらだらと話す」という意味でやや見下げた言い方である。どちらにしても一般に悪い意味で使われる。オーストラリア英語についても "drawling" は欠点 (fault) として言われる。この "drawling" は、のんびり話す印象であり、訛りの強い男性の特徴とされる。訛りの強い男性には、早口も多い。しかし、一般には早口は女性の特徴とされる。いずれにしても母音を比較的長く引っ張って、平らに話すのがオーストラリア英語である。

## (5) "Australians are lip-lazy" (オーストラリア人は唇を動かさずに話す) について

これは、「オーストラリア英語は発音が明瞭でない」「オーストラリア英語は鼻声である」「オーストラリア英語は早口である」等と同じ印象を述べた表現と受け取れる。つまり「口を十分に開けて発音しない」と言うものである。一般には、オーストラリア人の英語発音の欠点とされている。

## (6) その他のオーストラリア英語についての評判について

その他オーストラリア口語英語の発音については、次のようなことがよく言われる。

- a. "Australian speech is ugly" (オーストラリア口語英語は汚い)
- b. "Australian speech is affected" (オーストラリア口語英語は気取っている)

- c. "Australians are careless about their English" (オーストラリア人は英語の話し方に不注意である)

これらの印象は、多くは "個人的印象" であって、必ずしも言語的説明ではない。

## 5. オーストラリア口語英語の発音の分類

言語の発音は時間的、空間的に連続して変化する。また、その人その人毎に同じ語の発音の仕方も多少異なる。従って、厳密な意味においては、発音は一回限りのものである。それを敢えて固定した記号等で表わし、説明を試みることは、さまざまな誤解の原因となる。しかし、現実の発音は、明らかに、音量、口の構え、舌の位地、唇の位地等に特定の傾向を示す。そこで、ダイナミックにして連続的に変化する発音ではあるが、便宜的に固定化して捕らえ、適当に区切りをつけて、発音記号等で記述して説明することは、現実そのものではないが、説明の為にはわかりやすく便利である。

以下、この意味において、説明の目的に適う程度に簡略化した発音記号文字で、オーストラリア口語英語の具体例について、その実状・特徴を説明する。

オーストラリア口語英語 (表では A E と略記する。) の発音 (Accent) は、通常便宜的に次の 3 つの群 (3 Varieties) に分類される :

- (1) "Broad" の発音 (表では B と略記する。)
- (2) "General" の発音 (表では G と略記する。)
- (3) "Cultivated" の発音 (表では C と略記する。)

これら 3 つの発音の特徴を実例を付けて表にして示せば次の通り :

ただし、表のうち、S A : 問題の音を含む語の実例、D J : Daniel Jones の発音辞典 (*An English Pronunciation Dictionary*: 英国標準発音を記述したものとして定評がある。London. 1927) の標記 (標記文字を一部変更して使用) である。

S A :	meet,	sea	boot,	room	day,	cake	high,	light	cow,	now	know,	toe
D J :	mi:t,	si:	bu:t,	ru:m	dei,	keik	hai,	lait	kau,	nau	nou,	tou
A E (=Australian English)												
B :	meit,	sei	baut,	raum	dai,	kai	hoi,	loit	kiao,	niao	nau,	tau
G :	mijt,	sij	buot,	ruom	de:i,	ke:ik	hai,	lait	kao,	nao	nou,	tou
C :	mi:t,	si:	bu:t,	ru:m	dei,	keik	hai,	lait	kau,	nau	nou,	tou

## 6. 3つの Accent に対する "市民の一般的評判"

### (1) "Broad" について

- 「最も訛りが強い。」
- 「プレステージが最も低い。」
- 「教養ある人は使うべきではない。」
- 「放送用語としては好ましくない。」
- 「男言葉の目指す英語である。」
- 「悪い話し方 (bad speech) である。」
- 「toughness, large, hard, strong 等の印象がある。」

### (2) "General" について

- 「"Broad" と "Cultivated" の間の発音 (中間的なもの)。」
- 「プレステージも中間である。」

### (3) "Cultivated" について

- 「英国標準発音に非常に近い発音である。」
- 「訛りのない発音である。」
- 「プレステージが最も高い。」
- 「教育のある人 (Educated) の英語である。」
- 「放送用語として望ましい。」
- 「英国南部の教育ある人の英語 (Educated Southern British English: RP =Daniel Jones が推奨する標準英国英語) に近い。」
- 「オーストラリア人の11%のみが使用する。この大部分は女性である。」
- 「女言葉の目指す英語である。」
- 「好い話し方 (good speech) である。」

## 7. 3つの Accent の使用状況、シフトについて

言語の使用というものは、ある人が何時でも、同じレベルの、例えば、"General" を、何時でも使うというわけではない。普段、"General" を使う人でも、もっと改まった状況の下では、"Cultivated" にシフトする。時には敢えて "Broad" にシフトする。これは極めて自然な言語活動である。従って、"Broad", "General", "Cultivated" の使用者は常に固定しているわけではない。

そんなわけで、"Broad", "General", "Cultivated" の使用がどのように分布しているかを見極める作業はなかなか複雑で難しい。近年、アメリカの Labov 等によって開発された "interview technique" を使うオーストラリアの社会言語学者：David Bradley, Mitchel, Delbridge や Edina Eisikovits 達によって少しづつ解明された結果は、次のようなものである。

(1) 「都市」と「田舎」

言語社会を「都市」と「田舎」の対立した極の軸で表わし、その線上に言語の使用傾向をマークすると、"Cultivated"は「都市」の極に、"Broad"は、「田舎」の極に集中する。"General"は、その中間と言うことになる。従って、Victoria州を例にとれば、Melbourneでは、"Cultivated"が多く、Colacのような地方では"Broad"が多い。また、オーストラリアでは、北より南が「都市」であるという切り方をするので、Brisbaneでは"Broad"であるが、Sydneyは、より"Cultivated"であり、Melbourneは更に"Cultivated"が強いことになる。

MitchelとDelbridgeの1965年、Sydneyでの調査結果では、"Broad": 22%, "General": 61%, "Cultivated": 17%であったという。これが、Sydney以外の地方では、"Broad": 38%, "General": 54%, "Cultivated": 8%と、「田舎」に行くにしたがって"Broad"の数が増加することが報告されている。

(2) 「男子」と「女子」

性別によっても言語の使用傾向は異なる。一般に「女子」は"Cultivated"に、「男子」は"Broad"に片寄る。前述のMitchelとDelbridgeの報告によれば、Sydneyの子供たちで、公立学校の生徒の場合、「女子」では、"Broad"が10%、"General"が69%、"Cultivated"が21%に対し、「男子」では、"Broad"が4倍の42%、"General"は56%、"Cultivated"は10分の1のわずか2%であるという。これも"Non-Catholic"の私立学校では、「女子」の場合、"Broad"が2%、"General"が54%、"Cultivated"が44%となり、「男子」の場合、"Broad"が15%に減り、"General"が圧倒的の80%、"Cultivated"も5%になる。要するに、経済的階層等の言語社会環境に応じて、言語使用のスタイルのシフトが見られることが確認されている。特に低経済的階層の女子にあっては、言語の使用環境がフォーマル化するに応じて、"General"から"Cultivated"へ最もドラマチックにシフトすることが知られている。

(3) 「若年者」と「熟年者」

言語活動は、十代の「若年者」と五十代の「熟年者」では大きく異なる。例えば、「流行語」は一般に「若年者」の間から始まり、「古語」は、「熟年者」に維持されている。「若年者」と「熟年者」との間では言語レベルのシフトについてはギャップがある。

"Broad"から"General"にシフトする現象を見ると、「若年者」は極めて簡単に"General"にシフトし、急激にその数が増えるが、「熟年者」は"General"への使用には極めて消極的で、その数は多くない。しかし、"Cultivated"に対しては別な傾向があって、「若年者」は、消極的で、「熟年者」に使用者が多い。"Broad"の使用者の数と逆の順位となる。田舎にいた"Broad"の話者が、シドニーのような都会に出てくる場合を想定すると、「若年者」は"General"へシフトし、「熟年者」は"Cultivated"にシフトする。結果として、都会での"Cultivated"の使用者は、「熟年者」に多い。

(4) 「アングロ系」と「非アングロ系」

オーストラリア口語英語の使用状況を観察する時には、出身民族、あるいは親の民族等、オーストラリアで一般に"バックグラウンド"と呼ばれている出身民族を配慮する必要がある。例えば、"Broad"の主な使用者は、「アングロ系」であって、「イタリア系」や

「ギリシャ系」には使用者は少ない。彼らには "Broad" が使いこなせないと言ってもよい。これに対し "Cultivated" は、一定の修養が必要であるからであろう、その使用者数は意外にも「ギリシャ系」がトップで、「アングロ系」は、その次に来る。「イタリア系」は、"General" の使用者数が一番多く、"Cultivated" の使用者は、"Broad" の使用者数と同程度である。「アングロ系」だけで見れば、"Broad" の使用者が圧倒的に多く、"General", "Cultivate" の順にその使用数は順次減る。オーストラリア口語英語の極めて特徴的な "Broad" アクセントを支えている使用者は、やはり「アングロ系」なのである。

#### (5) 「労働者階級」と「中流階級」

言語の使用状況を観察する時、言語使用者の「経済的階層」も考慮する必要がある。一般に、「労働者階級」には、"Broad" の使用者が多く、「中流階級」には、"Cultivated" の使用者が多い。「労働者階級」を「上層」と「下層」に分けると、「上層労働者」は、圧倒的に "General" の使用者に傾き、「下層労働者」は、"Broad" の使用者に傾く。

以上のことを極めて大胆に図式的に纏めると、"Broad" の使用者の中心は、「田舎」の「男性」で、「アングロ系」の「下層労働者階級」（「若年」「熟年」は同程度）ということになる。"Cultivated" の使用者の中心は、「都会」の「女性」で、「ギリシャ系」の「熟年」「中流階級」ということになる。

## 8. オーストラリア口語英語発音（特に "General" と "Broad" ）の特徴

### (1) 母音の脱落

*deteriorate*, *self-opinionated* では、/o/ が落ちて、deterirate, self-opininated に。*January* では、/u/ が落ちて、Janary に。*reverberation* では、/@/ が落ちて、reverbration に。*subsidiary* では、/i/ が落ちて、subsidiary に。*terrific* では、/e/ が落ちて、trific に。*temporarily* では /o/ と /ri/ が落ちて、tempraly に。*library*, *temperature* では、/ra/ が落ちて、libry, tempture に短縮される。

### (2) 母音の挿入添加

*flown*, *grown*, *known*, *shown* では、/w/ と /n/ の間に母音の /@/ が挿入されて、/flouw@n/, /nouw@n/, /shouw@n/ のように発音される。綴りはしばしば "e" を使って、flowen, growen, knowen, showen 等と綴られることがある。

*athlete*, *hydrangea*, *menstration*, *umbrella* では、/e/ が挿入添加されて、/athseli:t/, /haidereindz@/, /menestreishn/, /amberel@/ のように発音される。

*angling*, *gambling*, *mingling* 等では、やや長めの /@:/ が挿入添加されて、/ang@:lin/, /gamb@:lin/, /ming@:lin/ 等のようになる。

*film*, *helm* 等の /l/ と /m/ の間には、母音の /@/ が挿入添加されて、/fil@m/, /hel@m/ 等のように発音される。



*amenable*, *grievous*, *mischievous*等の母音の前には、/i/が挿入添加されて、/ə@meni@bl/, /gri:vi@s/, /misch:vi@s/等ようになる。

### (3) 母音の変質

オーストラリア口語英語では、*eight*, *mate*, *name*等の発音は有名なことであるが、英国標準英語等で/ei/と発音される母音が/ai/と発音され、それぞれ/aɪ/, /maɪ/, /naɪm/等ようになる。その他の母音の変質は、他の英語と比べてそれ程目立つものはない。強いて挙げれば、*bouquet*, *boutique*等で、/u:/が/ou/と発音されて、/bouke/, /boutik/ようになる。*debut*は/e/が/ei/のように二重母音化して/deɪbu/に。*really*では、/ia/の二重母音が/u:/のように長母音化して/ru:li/と発音される。また、*ornament*では、子音の変質と合流して/na/が/d@/のように弱化して/o:d@ment/のように発音される。*Italian*の語頭の"I"を、/i/ではなくて/ai/と二重母音で発音して、/aɪtali@n/となるが、なにもオーストラリア英語に限った現象ではない。

### (4) 子音の脱落

*certainly*, *only*, *vulnerable*では、子音の/l/が落ちて、/sa:tni/, /ouni/, /vanerabl/等と発音される。また、*fulfill*, *rawplug*では、子音の前側の/l/が落ちて、/fufil/, /ro:plag/と発音される。

*regularly*, *similarly*では、音節 = 子音 + 母音 : /la:/が落ちて、/regvuli/, /simili/等と発音される。また、*Australia*, *million*では、子音の/l/が/y/の音に変化(弱化)して、/o:rstra:v@/, /miyon/のように発音される。

*length*, *negligible*, *recognise*, *strength*では、子音の/g/が落ちて、/lenth/, /neligibl/, /rekonaizu/, /strenth/等と発音される。

*arctic*, *asked*, *picture*では、子音の/k/が落ちて、/a:tik/, /a:st/, /pi'ch@/のように発音される。

*vehicle*, *have*では、子音の/h/が落ちて、/vi:k/, /av/と発音される。因みに"better have"は"better of"と取り違えられる。

*cerebral*, *secretary*, *extra*, *terrestrial*では、子音の/r/が落ちて、/serebo:l/, /sektry/, /eksta/, /terestial/等と発音される。

その他、*pumpkin*では、/p/が落ちて、/pamkin/。 *Sydney*では、/d/が落ちて、/sini/。 *exactly*, *script*では、/t/が落ちて、/igzakli/, /skrip/になる。*drawing*では、/w/, /g/が落ちて、/dro:in/と発音される。

### (5) 子音の挿入添加

*avocado*では、/a/と/v/の間に子音の/d/が挿入添加されて、/advokado/と発音される。*escape*, *espresso*では、/k/が挿入添加されて、/ekskeip/, /ekspresso/となる。*aluminium*は、/m/が挿入添加され、/alminim@m/になる。*contractual*, *rawedge*, *raw sewage*, *refectory*, *tortuous*では、/kontraktrəl/, /ro:redg/, /ro: so:ridg/, /refrektori/, /to:tur@s/のように/r/が、挿入添加される。また、*basic*, *statistic*では、/beɪsɪk/, /stəstɪstɪk/のように/s/が挿入添加される。*intermediaries*では、/ɪnt@:medi@triz/のように/t/が挿入添加される。

## (6) 子音の変質

*dual*では、子音の /d/ が /j/ に変質して、/ju@V/ と発音される。*unequivocally*では、二つある /V/ のうちの前の /V/ が /b/ に変質して、/@nekwivokably/ となる。*album, capsicum, home in, maximum, minimum, pantomime*等の /m/ は /n/ に変質して、/alban/, /kapsik@n/, /honin/, /maksim@n/, /minim@n/, /pantomain/ 等と発音される。また、*phenomenon, ransack, rhododendron*は、/n/ が /m/ に変質して、/fenomen@m/, /ramsak/, /rhododendr@m/ 等と発音される。

*actually, fracture*では、/t/ が /sh/ に変質して /akshualy/, /fraksh@/ 等と発音される。*Tuesday*では、/t/ は /ch/ と発音され、/chuzdai/ に。また、*congratulation, quarter*の /t/ は /d/ に変質して /kongraduleishs@n/, /ko:d@/ 等と発音される。逆に、*hundred*の /d/, *architect*の /k/ は、しばしば /t/ になって /handret/, /a:titekt/ 等と発音される。*asphalt, consume*の /s/, *presume*の /z/ は共に /sh/ に変質して、/ashfalt/, /konshu:m/, /preshu:m/ 等と発音される。また、*anything, everything, nothing*等では、語尾の *-ing*の有声音 /g/ が無声音化されて /k/ となり、/enithsink/, /everithsink/, /nathsink/ のように発音され、更には、/k/ が脱落することも普通である。また、/f/ と /p/ の音が入れ替わって *diphthong*は /diphthong/ に、逆に *pernickety* は、/f@:niketi/ と発音される。*Perth*は、/ths/ が /f/ に入れ替わって /p@:f/, *sheaf*は、/f/ が /ths/ に入れ替わって /shiths/ 等と発音される。/k/ と /s/ の順序の入れ替えはしばしばで、*accelerate, accept*では、/askel@leit/, /askept/ 等と発音されることがしばしばである。*asterisk*は /akserisk/ と発音する人がいる。

## (7) 単語、語句の連続、区切り

*an area, an apple, for ever*では、区切りが前に移され、/@ ne@ri@/, /@ napl/, /fo rev@/ のように発音される。

## 9. 終わりに 要約

この小論では、特にオーストラリア口語英語の発音について、オーストラリア英語が、アメリカ英語、イギリス英語とは異なるところがあることを説明した。また、オーストラリア口語英語の Accent は大きく分けて、"Broad" と "General" と "Cultivated" の3つに区別されるが、これらの使用は、誰がどの Accent を使用するかは、固定的に決まったものではなく、むしろ、その言語の使用者は、自分が属する社会的環境、状況、あるいはその文が使われる文脈に応じて、ダイナミックにシフトすることを述べた。例えば、都市、田舎、若年、熟年、男、女、アングロ系民族、非アングロ系民族、労働者階級、中流階級等で、Accent のシフトがなされる。要するに、言語の発音は、その言語の使用者のおかれている社会的環境、その言語を使う文脈を、シンボリックに反映するのである。言語の使用者は、その使用目的にあわせて、幾つかの言語的層を、例えば、"Broad", "General", "Cultivated" を巧みにシフトしながら、自らの社会的立場や願望を言語活動を通して表明しているのである。

添付別表

## 説明に使用される発音標記表

この小論では、発音の標記は次のようにする。

全般的には、Daniel Jones の *An English Pronunciation Dictionary* (1927 英国英語の標準発音を標記したものとして定評がある。) の方式をベースに、一部簡略変更して、次のように標記する。サンプルの語はこの辞書で使用しているもの。

母音は、i, e, u, a, o, @ 等の文字記号を使って標記する。

子音は、p, b, t, d, k, g, m, n, l, r, f, v, s, z, h, w, y, j, z 等、及びこれらを組み合わせた文字を使って標記する。

音を含む語例	使用される発音標記	語全体の発音標記
<i>(1) Vowels (長および単母音)</i>		
see	i:	/si:/
pity	i	/piti/
get	e	/get/
hat	a	/hat/
father	a:	/fa:thz@:/
not	o	/not/
law	o:	/lo:/
book	u	/buk/
food	u:	/fu:d/
but	a	/bat/
about	@	/@baut/
fern	@:	/f@:n/
<i>(2) Diphthongs (二重母音)</i>		
day	ei	/dei/
high	ai	/hai/
boy	oi	/boi/
no	ou	/nou/
now	au	/nau/
here	i@	/hi@/
there	e@	/thze@/
poor	u@	/pu@/

(3) *Consonants* (子音、組み合わせのみ)

<i>church</i>	ch	/ch@:ch/
<i>shut</i>	sh	/shat/
<i>thin</i>	ths	/thsin/
<i>there</i>	thz	/thze@/
<i>where</i>	wh	/whe@/

## 参 照 文 献

- (1) Horvath, Barbara M. *Variation in Australian English: The Sociolects of Sydney*. Cambridge University Press. 1985.
- (2) Lavob, W. *The social stratification of English in New York City*. Washington, D. C. Center for Applied Linguistics. 1966.
- (3) Shnukal, A. "You're gettin' somethink for nothing: Two phonological variables of Australian English" in *Australian Journal of Linguistics* 2. pp. 197-212. 1982.
- (4) Mitchel, A. G. and Delbridge, A. *The pronunciation of English in Australia* Sydney. Angus & Robertson. 1965.
- (5) Vall P., Gallois C., and Callan V. "Language attitudes: A perspective from social psychology" in *Australian English, The Language of A New Society* edited by Peter Collins and David Blair, OQP, 1989. p p. 89-102.
- (6) Reeve, J. "Community attitudes to Australian English" in *Australian English, The Language of A New Society* edited by Peter Collins and David Blair, OQP, 1989. pp. 111-126.
- (7) Blair, D. "The development and current state of Australian English: A survey" in *Australian English, The Language of A New Society* edited by Peter Collins and David Blair, OQP, 1989. pp. 171-175.
- (8) Cochrane, G. R. "Origins and development of the Australian accent" in *Australian English, The Language of A New Society* edited by Peter Collins and David Blair, OQP, 1989. pp. 176-186.
- (9) Bernard, J. R. "Regional variation in Australian English: A survey" in *Australian English, The Language of A New Society* edited by Peter Collins and David Blair, OQP, 1989. pp. 255-259.
- (10) Bradley, D. "Regional dialects in Australian English phonology" in *Australian English, The Language of A New Society* edited by Peter Collins and David Blair, OQP, 1989. pp. 260-270.
- (11) Baker, Sidney J. *The Australian Language*, Sun Books, Melbourne, 1979. "Chapter XXII: The Australian Accent" pp. 431-455.
- (12) Harris, Max. *The Australian Way with Words*. "6 Pronunciation" pp. 200-227.
- (13) Sydney Committee for Overseas Students' pamphlet: "Australian Speech".
- (14) Bernard, John. "Some Local Effects of Post Vocalic /r/" in *The Cultivated Australian* edited by J. E. Clark. Hamburg. Buske. 1985. pp. 319-332.

- (15) Bradley, David and Bradley Maya. "The Phonetic Realisation of a Morpheme Boundary in Australian English" in *The Cultivated Australian* edited by J. E. Clark, Hamburg: Buske, 1985. pp. 333-340.
- (16) Hammarstorm, Goran. "On the Origin of Australian English" in *The Cultivated Australian* edited by J. E. Clark, Hamburg, Buske, 1985. pp. 373-380.
- (17) Scruby, Harold (Haitch). *Manglish Whatever Happened to Our Language?* 1989. Collins Publishers Australia.
- (18) Shnukal, Anna. *A Sociolinguistic Study of Australian English: Phonological and Syntactic Variation in Cessnock, NSW*. UMI Dissertation Services. 1991.